

タイトル	David Airey and King Chong(著) 『Tourism in China : Policy and development since 1949』
著者	伊藤, 昭男
引用	北海商科大学論集, 3(1): 46-49
発行日	2014-02

書評

David Airey and King Chong(著)

『Tourism in China : Policy and development since 1949』

(Routledge 、2011 年、329 頁、定価 16,886 円)

(一)

本書は、中華人民共和国が成立した 1949 年以降の観光政策を考察したものである。1978 年の改革・開放以後、とりわけ 2000 年以降、中国経済の成長とも連動して観光におけるインバウンドおよびアウトバウンドは急速に増大しており、今後、世界の観光面におけるプレゼンスは一層高まることが予想されている。しかしながら、研究面での考察は実態を含めていまだに未解明な部分が多く、進展が期待されている段階にある。本書は、こうした研究環境状況を鑑み、中国の観光政策に焦点を当て、独自の理論的フレームワークによるアプローチから中国の観光政策の進化を考察したものである。なお、著者の David Airey は、イギリスのサリー大学教授、King Chong はサリー大学客員講師である（本書記載時）。

(二)

本書は以下のとおり四部構成、11 章から成る。なお、内容理解のために章以下の項目についてもあえて記載している。

第一部 理論的文脈的背景

1 序論

概念的背景、観光の政治的次元、観光開発における観光政策の重要性、観光政策形成における理論的次元、方法論のデザイン、理論的および実践的な含意、本書の構成

2 文脈、歴史、概観

序、いくつかの重要な特徴、1949 年以前の中国における旅行および観光（1662 年までの中国王朝、王朝から共和国へ、政策と開発に関する含意）、1949 年以後の観光（毛沢東時代（1949-78）：革命と熱狂的社会主義、鄧小平時代（1978-97）：進化と現実的的社会主義、集团的リーダーシップの時代（1997-現在）：公共および調和的的社会主義）、国家政策形成と観光開発、中国の政治・行政システム（中央の国家機関、地方省の権力と政府）

3 概念的フレームワーク

政治経済、政策と観光政策（国家政策、部門政策、観光政策、観光政策のタイプ）、概念的フレームワーク（役割、基盤の構築）、概念的フレームワークの探求（政策インプット、政策プロセス、政策アウトプット）

第二部 1949 年からの観光開発と政策形成

4 1949 年以降の中国における国家モデルの変化

中華人民共和国の進化：概観、毛沢東時代（1979-78）：革命と熱狂的社会主義（毛主義のビジョン：矛盾と革命、社会主義の初期路線、大躍進と文化大革命、中国の計画経済のプロトタイプ）、鄧小平時代（1978-97）：進化と現実的社会主義（鄧主義の政治論理：共産主義を固守した経済改革運営、計画経済モデルから市場経済モデルへの変遷）、集团的リーダーシップの時代（1997-現在）：公共および調和的的社会主義（階級的基盤から公共的基盤の構成員へ）、結語

5 毛沢東時代の観光政策

期間 1949-78：政治的外交的道具としての観光（国際的国内的环境、毛時代の観光政治の概観、3つの発展段階）、結語

6 国家政策形成者

概観、核となる政策形成者（リーダー、中国国家旅遊局(CNTA)、国家發展和改革委員会(NDRC)、財政部(MoF)、共産党中央宣伝部、外務部(MoFA)、全国人民大会議員および政治協商会議メンバー、国家質量監督檢驗檢疫総局(SGAQSIQ)、地方政府、政府系シンクタンク)、他の政策プレーヤー、結語

7 鄧小平時代－変化の時代

期間 1978-85：経済活動としての観光（背景、基本的観光政策決定、具体的観光政策決定、要約）、期間 1986-91：経済的産業としての観光（背景、基本的観光政策決定、具体的観光政策決定、要約）、期間 1992-97：重要産業としての観光、背景、基本的観光政策決定、具体的観光政策決定）、結語

8 集团的リーダーシップの時代

期間 1997-現在：多機能戦略産業としての観光、背景、新たな観光政策パラダイム、基本的観光政策決定）、5 期間の結論

第三部 中国の4つの特徴的地域

9 4つの特徴地域における観光政策問題

香港とマカオ特別区（香港、マカオ）、チベットと台湾（チベット、台湾海峡関係）、結語

第四部 理論的現実的インプリケーション

10 理論的インプリケーション

中国の国家観光政策、政策要因の相互関係性（相互作用の共生、相互関係性と主要な因果関係）、結語

11 経験と教訓

経験（政治的インフラ、リーダーのビジョン、外部投資と専門的知識、海外と内部プロセスの結合、ゼネラリストとスペシャリストの専門的知識の結合、国家の方向性）、質・倫理・マーケティング、見通し

付録

注

参考文献・資料

索引

(三)

本書の特徴は次のとおりである。

第一は、観光政策を国家政策の観点から時代区分していることである。目次内容からもわかるとおり、1949 年以後の中国の観光政策は①毛沢東時代：政治的外交的道具としての観光の時代、②鄧小平時代：経済的産業としての観光および重要産業としての観光の時代、③集団的リーダーシップの時代：多機能戦略産業としての観光の時代、と大きく 3 区分され、中国観光の歴史的変遷が考察されている。第二は、観光政策を理論的なフレームワークの観点から考察しようとしていることである。本書では Peter Hall によって理論化が試みられた政策形成の概念的フレームワークとしての政策パラダイム概念の応用として観光政策パラダイムの概念を提示し、①中国の観光政策パラダイムに関する 12 の仮説の提示と、②1978 年以後の中国における観光政策パラダイムの進化（中国における国家観光政策における政策要素間の関係考察）を考察している。そこで示された「中国の観光政策パラダイムに関する 12 の仮説」は次のとおりである。仮説 1) 中国における観光政策パラダイムは、イデオロギーの正統派的慣行と観光特有の本質から成る。仮説 2) 観光特有の本質は、イデオロギーの正統派的慣行、環境状況、観光の属性によって形づくられる。仮説 3) 観光政策パラダイムとそれを構成する本質は国家のイデオロギーの正統派的慣行に反する場合、形成することができない。仮説 4) イデオロギーと観光政策パラダイムは、双方とも、認知と評価の許容量を有する信念のシステマ的集合に基づく。仮説 5) イデオロギーと観光政策パラダイムは、相互依存的である。仮説 6) 観光政策パラダイムは、観光政策形成過程の中核（ハブ）として作用する。仮説 7) 国家が支配的な役割を果たし、観光開発が最初から無および観光政策パラダイムが全体的に欠如していた中国のような国において、政策パラダイムの制度化は、政策形成過程において重要な役割を果たす。仮説 8) 観光政策パラダイムと観光制度はシナジーの関係を有す。仮説 9) 新たなイデオロギーの正統派的慣行と新たな観光政策パラダイムが発生したとき、存在している制度は拮抗するであろうが政治的プレッシャーはそれらを結局、変化させる。仮説 10) 観光における政策形成とは、政策形成者が政策志向の学習(learning)と調整に従事しているところの政策過程である。仮説 11) イデオロギーの正統派的慣行および観光政策パラダイムと制度が変化する際、政策アクターの役割は存在している制度よりもさらに重要である。仮説 12) (中国の経験から) 政策要因間の相互関係は、観光政策形成過程の推進を御する。また、「1978 年以後の中国における観光政策パラダイムの進化（中国における国家観光政策における政策要素間の関係考察）」は、「1979～1985 年」「1986～1991 年」「1992～1997 年」「1997 年～現在」の 4 つの期間をそれぞれイデオロギーの正統派慣行と観光特有の本質に分けて考察している。第三は、観光政策形成の主体について考察していることである。観光は高度な政治現象であるともいわれ、政治自体がその国の歴史や社会文化と深い関係があると考えられる。また具体的な政策は制度・組織を通じて推進されることから、中国における観光政策形成に係わる主体を考察することは、観光政策パラダイムおよび観光政策の変遷を探究する上で欠かせない作業といえる。本書では核となる観光政策形成主体として、中国国家旅遊局(CNTA)、国家發展和改革委員会(NDRC)、財政部(MoF)、共産党中央宣伝部、外務部(MoFA)、全国人民大会議員および政治協商会議メンバー、国家質量監督檢驗檢疫総局(SGAQSIQ)、地方政府、中国社会科学院など政府系シンクタンク、全国旅遊工作会議をあげており、これらと政治リーダー（共産党の指導者、国務院常務会議メンバーなど）との相互関係において観光政策決定がなされるとしている。これによ

り実質的な担当部局である中国国家旅遊局(CNTA)の政治力は強くないものの、時代の状況に適合した観光政策が強力に推進されるとしている。

(四)

「中国観光に関する政策形成は広く研究されておらず (13 頁)」、「本書が国家政策形成のパースペクティブから中国における観光開発に関して主要な根本的問いに解釈を提供する最初のもののひとつである (13-14 頁)」と自ら評価するように、本書の最大の意義は、中国における観光政策形成を、理論的フレームワークを通じて考察した点にある。その理論化の基本的視座は、Peter Hall(1993)の研究にある。彼はイギリスのマクロ経済の政策形成の研究 (例えば、経済政策パラダイムとしてのケインジアンとマネタリアン、政治パラダイムとしてのサッチャリズムとレーガニズムなど) から政策形成における“観念”の機能を複合概念の“政策パラダイム”として概念化した (なお、彼は政策パラダイムの概念を提示するにあたり、イギリスとスウェーデンの社会政策を政治的学習の観点から研究した Hugh Hecló の研究 : Hugh Hecló(1974), *Modern Social Politics in Britain and Sweden*, Yale University Press. に多くの示唆を得ている)。本書はこの政策パラダイムの応用として「観光政策パラダイム」の概念を提示し、イデオロギーの正統派慣行と観光特有の本質から成る中国の観光政策パラダイムという概念的拡張の観点から中国の観光政策の進化を考察した。とかく観光学には理論がないといわれているが、本書において用いられた観光政策におけるポリティカル・エコノミーの応用による理論的アプローチは、観光学における理論的貢献として評価しうるものである。また、国家観光政策を形成する政策アクターについて考察されていることも本書の魅力である。すなわち、中国の観光政策形成は中国の歴史的経路に依存した社会・文化・政治を反映しているとともに、組織・制度の相互関係性を有した複雑なものである。衆知のとおり中国においては“関係 (グワンシ)”と呼ばれる人間関係が政治経済社会に及ぼす影響は大きく、このことが一層、政策形成に対する理解を欧米・日本にとって難解なものにしている。そのため観光政策形成主体について構造的に解明しようとした研究はこれまでほとんどなく、その点で本書は先進的な取組として評価しうる。

こうした評価の一方でももちろん課題も存在する。例えば中国の観光政策パラダイムを構成するイデオロギーの正統派的慣行はどのような国内外の諸要因との関係メカニズムによって変化するのであろうか、また、政策要因間の関係性は先にあげた中国の観光政策パラダイムに関する 12 の仮説だけでは不十分であり、今後さらなる探求が必要であろう。しかしながら、本書は、これまでにない理論的フレームワークによって中国の観光政策の進化と形成構造を考察した意欲的な研究書であり、観光研究者、中国研究者に広く読まれるべき文献である。

(伊藤昭男)